

# 室町、桃山時代の唐織をめぐる

——高台寺所蔵唐織打敷を中心に——

河上繁樹

はじめに

当館では、昭和五十四年以来、京都の社寺を対象にした文化財の調査「京都社寺調査」を毎年行なっている。平成二年度は東山の高台寺の調査を実施した。

高台寺は、豊臣秀吉の夫人高台院が秀吉の冥福を祈り、また自らの菩提所として慶長十一年（一六〇六）に現在地（東山区下河原町）に建立した寺院である。高台院は、ここ高台寺を終焉の地として禅床三昧の日々を送り、寛永元年（一六二四）九月六日七十七歳でこの世を去った。

高台寺には、高台寺蒔絵として著名な蒔絵類をはじめ、秀吉や高台院関係の遺品がいくつか伝えられている。染織品では秀吉の所用と伝える「鳥獣文様綴織陣羽織」や高台院が着たという「亀甲花菱文様繡箔打掛」が桃山時代を代表する遺例として知られているが、

今回の調査において、さらに桃山時代から江戸時代初頭の染織資料が発見された。それらは唐織をはじめ、刺繍、金欄など合計十枚の打敷で、そのなかには慶長十二年（一六〇七）高台院寄付と記された唐織の打敷一枚があり、また刺繍の打敷にも慶長七年（一六〇二）の年紀が記されているなど制作年代の下限が明らかでない遺品が含まれている。

本論では、高台寺に伝えられた打敷のうち、主に唐織の紹介を行ない、これに関連して室町時代から桃山時代に至る唐織の変容と、桃山時代の唐織の特色について考察を進めたいと思う。

## 一、高台寺の打敷

今回の調査で確認された打敷は十三枚であった。このうち三枚は各々元文五年（一七四〇）、弘化三年（一八四六）、同四年（一八四七）の奉納銘等が記された江戸時代の金・銀欄の打敷である。残る十枚の

打敷が桃山時代から江戸時代初頭の遺例で、その内訳は七枚が唐織、一枚が刺繍、一枚が金襴、一枚が摺箔である。

本章では、これら十枚の打敷の名称・法量・品質形状・銘文を掲げ、唐織については文丈・窠間幅・絵緯の色を加えた。なお、唐織の地組織は、すべて経三枚綾、Z流れ。法量の単位はセンチメートルである。

1 〈萌葱地立涌に桐文様唐織打敷〉

一枚

〔図7 挿図1〕

〔法 量〕 縦一七六・〇 横一七四・五

〔品質形状〕 正方形、鏡仕立て。

表は萌葱地立涌に桐文様唐織。

裏は萌葱練緯、縦五枚接ぎ合せ。

〔銘 文〕 裏面に「七番／高臺院殿寄附 高臺禅寺／慶長十二丁  
夷則良日／三片之内」の墨書銘がある。

〔唐 織〕 文丈 三〇・二

窠間幅一九・七

絵緯は立涌文様を白（二部に紅）、桐文様は紅濃淡・白・

縹・青緑・萌葱・鶉

2 〈紅白段替山道に菊桐紋と枝垂桜文様唐織打敷〉

一枚

〔挿図2-1 a・b〕

〔法 量〕 縦一八一・〇 横一八〇・〇

〔品質形状〕 正方形、鏡仕立て。

表は紅・白段を経糸の締切りとした段替で、紅段には山

道に菊桐文様、白段には枝垂れ桜文様を表わした唐織。裏は白麻、縦六枚接ぎ合せ。

〔銘 文〕 裏面に「寛延三年庚午五月／修補焉／高臺常住」の墨書銘がある。

〔唐 織〕 文丈（山道に菊桐紋段）二九・〇

（枝垂桜文様段）一四・五

窠間幅一九・七

絵緯は紅・白・萌葱濃淡・縹・紺・青緑・鶉・浅葱（二部の絵緯は抜け落ちている）

3 〈萌葱地菊桐松竹鶴亀甲文様唐織打敷〉

一枚

〔図8 挿図3〕

〔法 量〕 縦一八〇・〇 横一八二・〇

〔品質形状〕 正方形、鏡仕立て。

表は萌葱地に菊・松・竹・鶴・亀甲文様を表わした唐織。

裏は白麻、縦六枚接ぎ合せ。

〔銘 文〕 裏面に「高臺常住」の墨書銘がある。

〔唐 織〕 文丈 二九・二

窠間幅一九・〇

絵緯は紅・白・紫・茶・鶉・紺・浅葱・萌葱・縹

4 〈紅地襷に桐雪持柳と楓筏文様唐織打敷〉

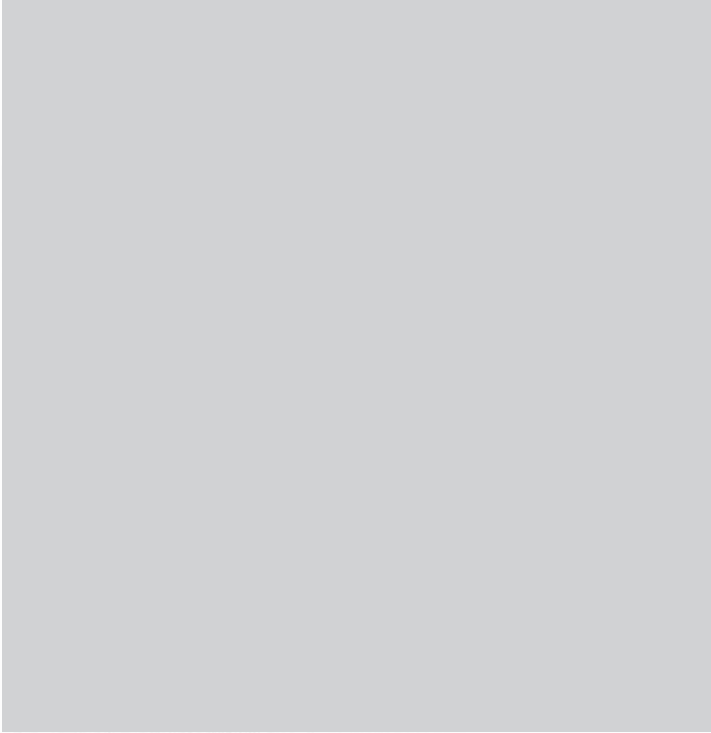
一枚

〔図9 挿図4-1 a・b〕

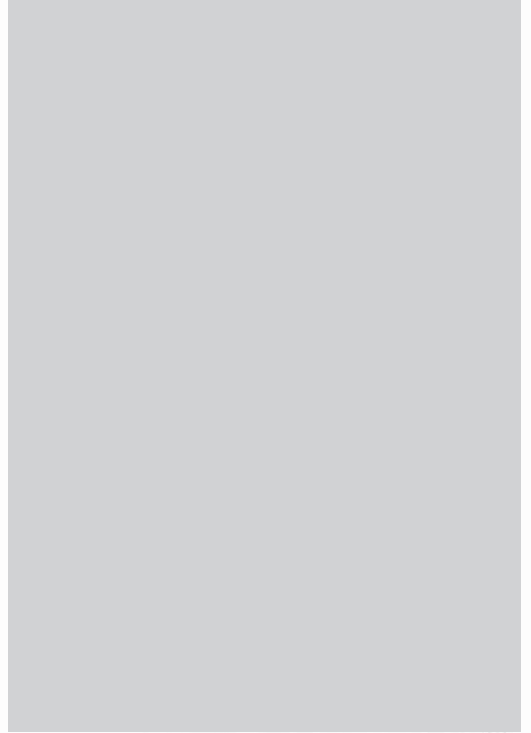
〔法 量〕 縦一五五・〇 横一五五・〇

〔品質形状〕 正方形、鏡仕立て。

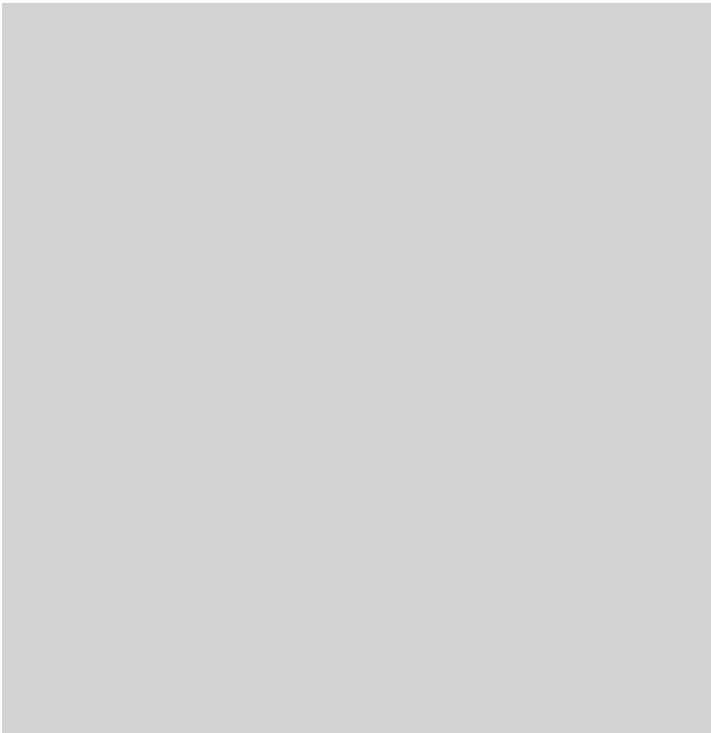




挿図 6 白地縄目襷に桜文様唐織等縫合せ打敷



挿図 5 萌葱地三ツ盛菊桐文様唐織打敷部分



挿図 7 紅地薔薇と雪持柳文様唐織等縫合せ打敷

表は紅地に二重襷・桐・雪持柳と、楓・筏・流水の文様を段替に表わした唐織。

裏は白麻、縦六枚接ぎ合せ。

〔銘 文〕裏面に「寛延三年庚午五月／修補焉／高臺常住」の墨書銘がある。

〔唐 織〕文丈（楓筏文様段） 二九・〇

（桐雪持柳文様段）二七・〇

窠間幅一九・五

絵緯は紅・白・縹・紫・萌葱濃淡・紺・青緑・鶉

5 〈萌葱地三ツ盛菊桐文様唐織打敷〉 一枚

〔図5〕

〔法 量〕縦一七八・〇 横一七九・〇

〔品質形状〕正方形、鏡仕立て。

表は萌葱地に桐と三ツ盛菊紋の唐織。

裏は白麻、縦六枚接ぎ合せ。

〔銘 文〕裏面に「高臺寺什物」「高臺寺」の墨書銘がある。

〔唐 織〕文丈 一九・五

窠間幅一九・五

絵緯は紅濃淡・白・青緑・縹・紺・萌葱・鶉・薄茶

6 〈白地縄目襷に桜文様唐織等縫合せ打敷〉 一枚

〔図6〕

〔法 量〕縦一五三・〇 横一五二・〇

〔品質形状〕正方形、鏡仕立て。

表は①白地縄目襷に桜文様唐織と、②紅萌葱段替松皮菱に枝垂れ桜と菊桐文様唐織の二種類の唐織を縫い合わせる。

裏は白麻、縦五枚接ぎ合せ。

〔銘 文〕裏面に「寛延三年庚午六月修補焉／高臺常住」の墨書銘がある。

〔唐 織〕①文丈 三七・五

窠間幅二〇・〇

絵緯は紅・浅葱・縹・黄・鶉・萌葱濃淡

②文丈（紅地段）一八・二

（萌葱地段）五・二

窠間幅一三・〇

絵緯は紅・白・紺・縹・萌葱・黄・鶉・紫・浅葱

7 〈紅地薔薇と雪持柳文様唐織等縫合せ打敷〉 一枚

〔図7〕

〔法 量〕縦一三〇・〇 横一三〇・〇

〔品質形状〕正方形、鏡仕立て。

表は以下の六種類の唐織を縫い合わせる。

①紅地枝菊楓文様唐織

②萌葱地桐雪輪文様唐織

③紅地薔薇と雪持柳文様段替唐織

④紅地花菱と菊花文様唐織

⑤萌葱地藤菊に桐丸文様唐織

⑥白地縄目襷に桜文様唐織（6―①に同じ）

裏は白麻、縦五枚接ぎ合せ。

〔銘 文〕裏面に「寛延三年庚午五月／修補焉／高臺常住」の墨書

銘がある。

〔唐 織〕①文丈 三二・〇

窠間幅二一・〇

②文丈 四五・〇

窠間幅一九・五

③文丈（薔薇文様段） 一二・〇

（雪持柳文様段） 二八・〇

窠間幅一九・五

④文丈、窠間幅とも不明

⑤文丈二六・〇 窠間幅不明

⑥ 6—①に同じ

8 〈紅白浅葱段替桜樹文様刺繍打敷〉

一枚

〔図 8-1-a〕

〔法 量〕縦一六九・〇 横一六三・〇

〔品質形状〕正方形、鏡仕立て。

表は紅・白・浅葱の段締切り地に大振りの桜樹文様を刺繍する。刺繍はすべて平糸で、桜花は白糸の渡し繻、その上から蕊などを黄・紫・白・萌葱・縹・浅葱などの色糸で留め繻する。樹幹は紺・浅葱・紫・萌葱糸の渡し繻、その上から皺を白糸、苔を黄糸で留め繻する。葉・枝は萌葱・鶯・浅葱・縹の色糸の渡し繻、葉脈を留め繻、枝の細かい部分も刺繍の糸はほとんど裏に回っていない。

裏は白平絹、縦五枚接ぎ合せ。

〔銘 文〕裏面に「廿六番 鷲峰山高臺寺什物」「慶長七年四月八

日／月峯清玉」の墨書銘がある。

9 〈紅地撫子唐草に窠文金欄打敷〉

一枚

〔法 量〕縦一七五・〇 横一六八・〇

〔品質形状〕正方形、鏡仕立て。

表は紅縹子地に窠文と撫子唐草文様の段替の金欄。窠文は縹子の裏組織で表わし、撫子唐草文様は金欄とする。裏は萌葱平絹、縦四枚接ぎ合せ。

〔銘 文〕裏面に「高臺寺殿御寄附と申也／祖忌之真前卓用／堂

司／周堅誌」の墨書銘がある。

10 〈浅葱綾地丸文散し摺箔打敷〉

一枚

〔法 量〕縦一一七・〇 横一一三・〇

〔品質形状〕正方形、鏡仕立ての変形。

表は浅葱地沢瀉鷹羽文様綾に蓮・輪宝・卍字の丸文様を摺箔で表わす。裏地は金茶練緯。

裏地は金茶練緯。

〔銘 文〕裏面に「無人紹有禪定門月忌之辰後室附寄焉／寛永第八辛未清住塔主宗磧記焉」の墨書銘がある。

1〜7番までの打敷には、合計十二種のデザインの唐織が用いられており、多様な文様が見られる。文様は、いずれも刺繍を思わせるほど柔らかく浮き、量感があり、おおらかな感じを失っていない。

また文様を表わした色系(絵緯)には、紅の濃淡、萌葱など七く九色ほどの華やかな色系が用いられ、なかでも紅が効果的に使用されている。こうした点は、桃山時代の唐織の特色と考えられる点であり、後に検討することにした。

8番は、刺繡の打敷で、紅と白と浅葱の段締切りの地に、大振りの桜の立木文様を刺繡している。大柄の文様をやわらかく刺繡する渡し繡の技法や、桜の幹の文様表現は桃山時代の刺繡に共通する特色を示す。この打敷には、裏に「慶長七年四月八日/月峯清玉」の墨書銘がある。慶長七年(一六〇二)には、まだ高台寺は開創されておらず、その前身の康徳寺<sup>①</sup>の時代である。現段階では月峯清玉という人物については不明であるが、おそらく奉納銘と考えられる年紀によって、この打敷の制作年代が知られることは貴重である。但し、第二章で述べるように、この打敷は元来小袖であったものを打敷に仕立て直しており、もとの小袖の制作年代はさらに遡ると考えられる。

9番は、紅地撫子唐草に窠文金欄打敷で、江戸時代に記された裏の墨書銘によれば、高台院が寄付したという。

10番は、寛永八年(一六三一)の奉納銘がある打敷で、浅葱の綾地に蓮・輪宝・卍字の丸文を摺箔の技法で表わしている。摺箔は文様から見て、打敷として奉納した際に施したものであろう。(9番、10番については本論と直接関係しないので、簡略な説明に留めた。)

以上の十枚の打敷は、桃山時代の唐織を主に年紀がある基準作を含んだ近世初期の染織資料である。

## 二、小袖を仕立て替えた打敷

打敷は仏前の前机などに敷く荘厳具の一種であるが、高台寺伝来の打敷十枚のうち、少なくとも1番〜5番・8番の六枚は、元来小袖など衣服であったものを仕立て替えた打敷であり、6、7番の唐織もそれに準じるものと考えられる。特に1番〜5番・8番の打敷は、一領の小袖を引き解いて一枚の打敷に仕立て替えている。

唐織の場合は、同じパターンの文様が繰り返されるので、本章では文様のつながり具合がわかる8番の刺繡の打敷によって、一枚の打敷が一領の小袖を仕立て替えたものであることを示すことにする。

8番の打敷は、(挿図8-1-a・b)のようにほぼ正方形の鏡仕立てとなっている。いま仮に、縫い合わされた裂ごとに①〜⑬の番号を付けると、①〜⑧の四周の額縁風の部分は現状で幅が三九センチほどあり、それぞれ小袖の前身頃と後身頃を用いていることがわかる。中央の鏡の部分は細長い五枚の裂⑨〜⑬が縫い合わされている。右端の⑨は裂の上下に袖の袂を丸く縫った針あとが残り、また裂の中央辺りから文様の方向が逆になっていることから袖山の見当がつき、この裂が片方の袖で、袖丈は四五センチほどと推測ができる。⑩、⑪の二枚は斜めに裁たれていることから衽であることがわかる。⑬の裂は真ん中あたりから、文様の方向が逆になっているので、もう一方の袖と考えられ、⑫は一六・五センチの幅から襟の一部とわかる。

①〜⑬の裂を図面上で切り離し、刺繡の桜樹文様のつながり具合

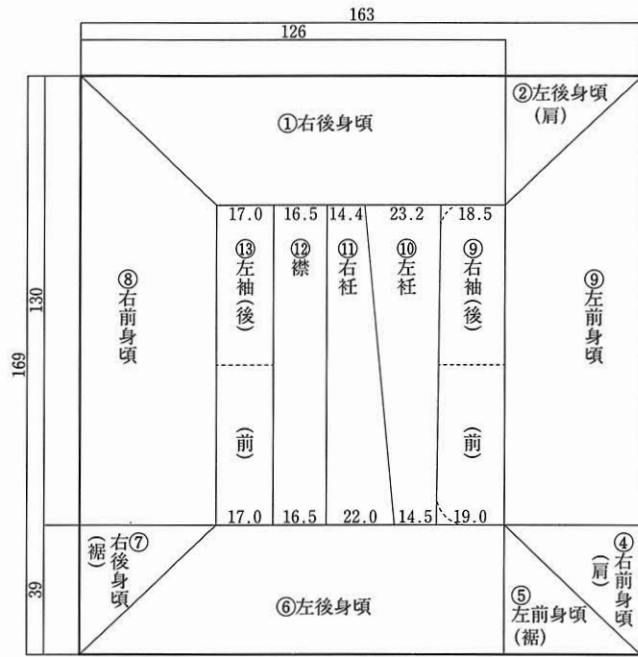


插图 8 - b 紅白浅葱段替桜樹文様刺繡打敷 図解

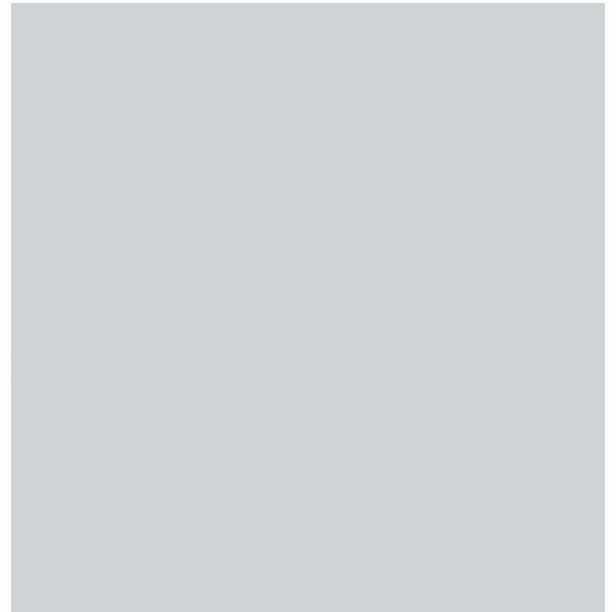


插图 8 - a 紅白浅葱段替桜樹文様刺繡打敷



插图 9 小袖 (復元)



から、もとの小袖に復元したのが〔挿図9〕である。もとの小袖は、段締切り地に、背と上前、下前にそれぞれ身丈いっぱいの大きな桜樹の立木文様を刺繍で表わした華やかなデザインであったことがわかる。

このように8番の打敷は一領の小袖を仕立て替えたことが明らかであるが、1番〜5番の唐織の打敷も概ね同様の鏡仕立てであり、もとは小袖などの衣服類であったことが推察できるのである。

小袖など衣服を打敷に仕立て替えて、その着用者の死後あるいは生前に、菩提供養や未来安穩などを念じて奉納された例は他にもいくつか知られており、<sup>2)</sup>かつてはこうした打敷を奉納することがしばしば行なわれていた。すなわち、高台寺の打敷も、当初から仏の荘厳のために誂えられた仏具ではなく、これらは桃山時代の服飾の一端を伝える資料として捉えることができる。そうした観点から見て、慶長七年銘の刺繍、あるいは同十二年銘の唐織の遺例を含む高台寺の打敷は、近世初期の服飾・染織史の展開を考えるうえで重要な存在といえる。

### 三、室町時代における唐織物

今までは高台寺に伝来した唐織を主とする打敷の概略を述べたが、本章では桃山時代の唐織の特色を検討する前に、桃山時代以前に唐織がどういう状況にあったのかという問題に触れておきたい。

唐織と言えば、まず思い浮べるのが能装束である。唐織は、絢爛華麗な能装束の代名詞といえるほど、能装束のなかでも豪華なもので、今日でも女体役全般の表着として能の舞台に欠くことのできな

い装束となっている。しかし、唐織は、それが生まれた当初から能装束を目的として織られたわけではない。唐織が能の装束として用いられた例は、すでに室町時代後期に見い出せるが、室町時代から桃山時代にかけて、唐織は小袖などの衣服に用いる織物として存在していた。<sup>3)</sup>

唐織の創始については、現在のところ明確ではないが、本論では唐織に先行する織物として「唐織物」を想定したい。

唐織物が小袖に用いられた早い例としては、『満濟准后日記』永享六年（一四三四）八月二十七日条に

自林還御之時一獻又在之。此時御引物。〔略〕御臺様。御小袖  
二重唐織物、一重十六替  
織物、二重繪縫物等。五重。盆小堆朱。金欄一端紺地。食籠削紅。  
引合。以上。

あるいは、『看聞御記』永享十年（一四三八）四月二十五日条に

南御方室町殿御禮參。〔略〕上様へ被進物  
小袖十重 唐織物、二重 <sup>八替</sup>もろあを。織物三重  
かたすその格子一、もろ地紅梅。紅引両。縫物一。縫物薄繪一。繪  
あをかうし一、地紅。  
一。うす紅梅一重。こき紅梅一重。金欄一反。段子三反。金香  
爐一。きり壺金文。盆五枚。

已上

とあり、引出物の小袖のなかに唐織物の存在がうかがえる。室町時代は織物が優位を占めた時代であり、当時、上層階級の人びとの

あいだでは、織物が尊ばれ、染物は格の低いものとして扱われていた。そうした風潮のなかで唐織物は特に高貴な織物として尊ばれた。引出物の小袖が列挙されるなかで、まず唐織物の小袖が筆頭に記されていることは、その格の高さを示している。

さらに、唐織物が武家のあいだで特別な扱いを受けたことは、文明十四年（一四八二）奥書の『御供古実』や、大永八年（一五二八）奥書の『宗五大艸紙』に明らかである。

#### 『御供古実』

一、唐織物の事。一段御賞翫之儀ニ候。尋常の人のめし候はずる事にてハ候はず候。からをり物をおとこ衆の着用之事ハ三管領へ御成の時御拝領の外ハ無之候。然共又一段の後に被下候事も可在之。

一、唐織物めし候はんずる人の位ハ。三管領の御母。又ハ日野殿三条殿の女中杯の御事たるべし。是も御免と被仰出候てめされ候。

#### 『宗五大艸紙』

一、公方様御服と申ハ。へ略へ又から織物ハ一段賞翫の儀に候。公方様の外。御台様。日野殿。三条殿。女中管領の御母御免にてめし候。又三職は拝領にてめし候。

という具合に室町時代の武家のあいだでは、上層階級の限られた人びと、あるいは拝領の場合にしか、唐織物の着用が許されていなかった。

しかしながら、猿楽者は例外で、正月の謡始めや演能時の小袖脱ぎによって、唐織物を拝領することがあった。『年中定例記』には

御台様よりはやし物前に観世大夫をめされて、から織物已下御ふく十被下候。勢州取次申て被下候。御ひろぶたにすハる。御小袖計也。

とみえ、唐織物など小袖が観世大夫に与えられている。こうして拝領した小袖は日常に着たのではなく、もっぱら演能のときに能の装束として用いられたと考えられる。

唐織物が能装束に用いられた例は、金春禅鳳（一四五四―一五三二？）の永正十年前後の芸談を伝えた『禅鳳雑談』に

へ略へ此春大内殿にてう月と六浦と仕候が、出立、はだにねりに、べにいらすのからおり物ばかりにて仕候へば、出立面白き由被仰候。

とある。大内殿、つまり大内義興邸において「雨月」と「六浦」とが舞われた際の出立に紅入らずの唐織物が用いられている。

また、同じく『禅鳳雑談』には

一、碁の能は、左阿弥作候。宗筠、たうのみねにて、うつせみ、からおり物にて、花ぼうしにて出られ候。まことのうつせみもかくやと思やられ候。

とあり、禅鳳の父宗筠(二四三二—一四八〇)が奈良多武峰の談山神社で、源氏物語に取材した「碁」という女能(麿曲)を舞った時、シテの空蟬の出立に唐織物を用いたと伝えている。

さらに、禅鳳は晩年の『反古裏の書』において

つかいの女房などは、ねりをも、はくゑなどの小袖よし。おり物、からおりなど似合わず。

と述べ、能の場合においても織物や唐織が低い身分の役柄には適当でないことを指摘している。

このように室町時代後期には、唐織物が能の装束にも用いられたが、禅鳳の記述でもう一つ注目されることは、『禅鳳雑談』で「唐織物」と言っていたものが、『反古裏の書』では「唐織」となっている点である。禅鳳の記述からすると、源氏物語の空蟬の扮装に用いた「唐織物」と、使いの女房にはふさわしくない、逆に言えば高貴な女性の役に適した「唐織」が全く別種の装束であったとは思えない。むしろ、「唐織物」と「唐織」とは同種の装束ではなかったかと思われる。『禅鳳雑談』は藤右衛門という人物が永正十年前後に見聞した禅鳳の芸談を記録した書、『反古裏の書』は成立年次が不明ながら永正以後とされることから、十六世紀前半にはそれまで「唐織物」と呼ばれていた織物が次第に「唐織」という言い方に変化していったのではないかと推測される。

室町時代末期から桃山時代になると、例えば『言継卿記』元龜二年(一五七二)七月二十五日条、皇居落成を祝う踊りに参加した京の町の人びとの衣裳について「各結構金銀、金欄、段子、唐織、織物、

紅梅、綺羅ヲ盡ス、先代未聞也」とあり、金欄や緞子と並んで「唐織」がみえる。また、『宗湛日記』は天正十五年(一五八七)正月三日に大坂城で催された大茶会で、秀吉が「上ニカラ、ヲリ、ノ御小袖」を着たという。いつぼう、能の伝書でも天正頃の『八帖花伝書』に「上着は唐織を本とせり」とあり、下間少進の『少進能伝書』『能之留書』『童舞抄』(慶長元年)などでも「唐織」の語を散見することから、桃山時代には能の装束や、また一般の小袖においても「唐織」という呼び方が定着したことがうかがえる。

ところで、「唐織物」や「唐織」という呼び方は、いずれにしても中国製の織物、あるいは中国風の織物のように思われがちである。しかし、前掲の『満濟准后日記』や『看聞御記』の引出物のなかには「唐織物」の小袖とは別に、中国から舶載された金欄や緞子の反物が併記されている(・傍点部分)ことから、唐織物という言葉が広い意味で中国から渡来した織物の総称として用いられていたのではなく、狭義にある特定の織物を指していたと考えられる。では、唐織物とはどんな織物だったのか。

この問題を考えるうえで、一つの示唆を与えてくれるのが、永享九年(一四三七)十月に後花園天皇が足利義教の室町殿へ行幸した際の義教夫人の衣裳に関する記述である。

『永享九年十月二十一日行幸記』

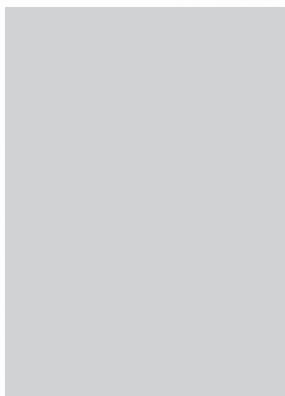
一、舞果て御臺の御方へならせ給て有一献。へ略御臺の御脇紅葉の七御そ、上地黄なる唐織物、御紋紅葉のちり葉。御小掛唐織物、御地うす色、御紋碁盤に菊。御唐衣赤色桐唐草をうき織同御紋ぬひ物。うき織ものゝこ御小袖、御紋龜の甲た

すきにひあふきひしと龍膽に雪との十六かわり。紅の生衣御袴也。

とあり、行幸の場では武家の義教夫人も公家のスタイルを装った。これを順にみると、御衣(桂)は紅葉重ねの色目で、重ねた一番上の桂が黄色地に紅葉の散り葉をデザインした唐織物、その上に着た小桂は碁盤に菊文様の唐織物、さらに唐衣は桐草文様の浮織物と刺繍、なかには段替の小袖に紅の袴を着けている。

義教夫人の着用した桂や小桂に唐織物が用いられている。この唐織物が浮織物と異なった織物であることは、続く唐衣が浮織物であることから容易に判断がつく。と同時に、故実を重んじる公家装束の性格からすれば、ここで用いられた唐織物がまったく新来の中国渡りの織物を採用したものとは考え難い。そして、なによりもこれら唐織物の文様は碁盤に菊や、紅葉の散り葉といった和風のデザインであった。

ここで、現存する桃山時代の唐織を組織のうえから見てみると、経三枚綾地に色とりどりの絵緯を用いて縫取織で文様を表わしているのであるが〔挿図10〕、これと同一の経三枚綾地の組織は、本来公家装束の有職織物に多く用いられてきた。平安時代以来、上位の人や

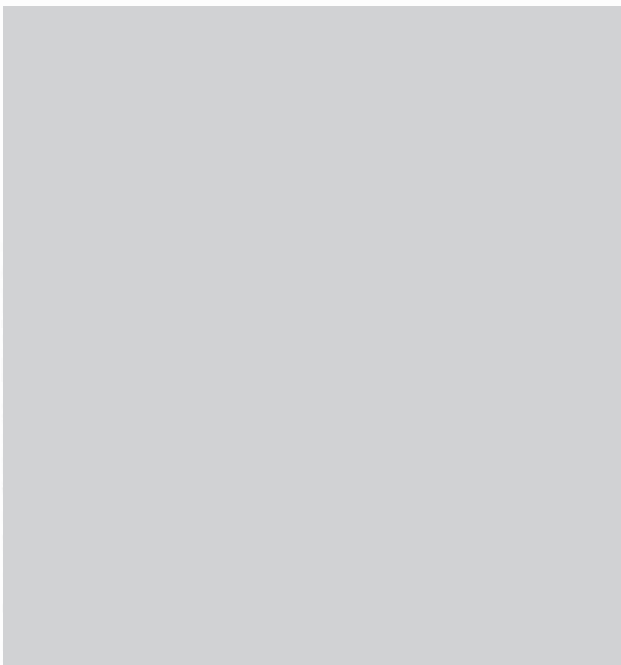


挿図10 唐織組織拡大図

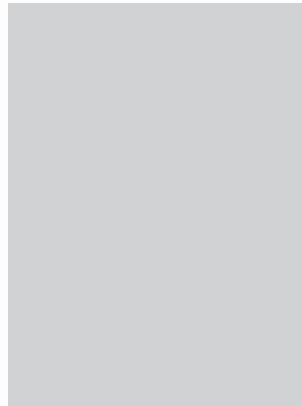
若い人の装束に用いられた浮織物は、地が経三枚綾で、地の緯糸を地組織から浮して文様を織り出したもの。そして、浮織物にさらに別の絵緯で上文を表わす、地文と上文の色を替えた華

麗な織物が二陪織物と呼ばれ、女装の表着や小桂などに用いられた。二陪織物の遺例は、鶴岡八幡宮の亀山上皇奉納と伝えられる鎌倉時代の御神宝装束に〔白地小葵鳳凰文様桂〕〔唐紙地窠に霞文様小桂〕などがある。さらにこの御神宝装束のなかには〔薄色地三ツ盛向鶴丸文様桂〕があり、これは経に紫、緯に白を用いた経三枚綾地に三ツ盛の向鶴丸が散らし文様風に織り出されている。この文様は絵緯を部分的に織り入れた縫取織によるもので、まさに後世の唐織に通じる技法である。

また、明徳元年(一三九〇)に足利義満が熊野速玉大社に奉納したと伝えられる神宝類に含まれる〔萌葱地小葵臥蝶丸文様相〕〔挿図11〕の表地は、地が経三枚綾で、小葵文様を地緯の浮織とし、臥蝶丸を別の絵緯の縫取織で表わした二陪織物〔挿図12〕であるが、これは明徳元年の『熊野新宮神宝目録』若宮の御神服一具中の「御薄衣一領、



挿図11 萌葱地小葵臥蝶丸文様相



挿図12 二陪織物組織  
拡大図

萌黄諸色唐織物、上丸文地小葵浮線綾、裏萌黄遠菱平綾」に該当する遺品と考えられ、かつてこの帔の表地を唐織物と呼んだことがわかる。

以上のことから、室町時代において唐織物と呼ばれた織物は、伝統的な公家の有職織物を基盤にした縫取織系の織物で、その文様もすでに和風化していたと考えられる。唐織物の「唐」は、中国製あるいは中国風という意味からは既に離れ、平安時代以来、貴族のあいだで好まれた有職織物の伝統をひく高級品のイメージとしての「唐」ではなかったかと思われる<sup>5)</sup>。

それ故、『永享九年十月二十一日行幸記』の義教夫人が着用した公家装束にも唐織物が用いられ、また、前掲の金春禪鳳の著述からわかるように、能においても高貴な役柄を象徴する装束として唐織物が採用された。

この高貴なイメージの唐織物が武家のあいだで表着化しつつあった小袖に採り入れられていった。単純な被服構成の小袖は、公家装束のように重ねの色目を重視した服飾美とは異なり、文様のもつ視覚的效果と多様性が要求される。重ねの色目に代って、片身替や段替の構成のなかで色彩や文様が対比されるようになり、さらに多様な文様で小袖を飾ることが求められ出した。最高級の織物として人びとの憧れであった唐織物は、以前にも決して多様多彩な文様を表現することに工夫をかさね、重厚華麗な織の美を展開しはじめた。文様を織り表わす絵緯がやわらかく浮いた高貴な趣の唐織物は、表

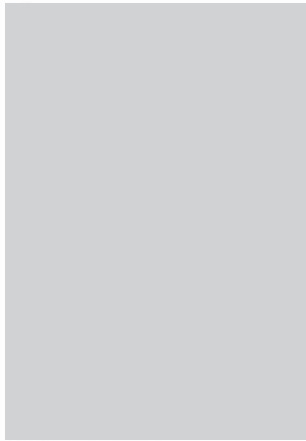
着化した小袖にふさわしい織物として賞翫され、桃山時代の唐織へと受け継がれていくのである。

#### 四、妙光寺の唐織袈裟

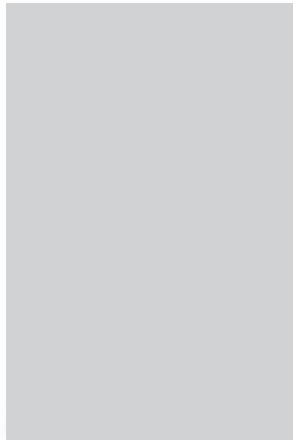
現在のところ、室町時代にまでさかのぼる唐織の遺品は確認されていない。しかし、ここに一つ気になる遺品が残されている。それは京都の妙光寺所蔵の九条袈裟で、その葉の部分に唐織が用いられている(挿図13)。この唐織は、地が茶色で、これに椿の立木文様(挿図14)、流水に岩と竹(挿図15)、柳の文様(挿図16)を表わしている。椿、流水、岩、竹は白、紫、萌葱、黄色の四色の絵緯の縫取織(挿図17)で表わし、柳は地緯を浮した浮織(挿図18)の技法で織り出している。一般に、桃山時代の唐織では、この唐織のように絵緯の縫取織と地緯の浮織を併用する例は少なく、また絵緯の色が七く九色に及ぶのに対して、この唐織は絵緯の縫取織と地緯の浮織を併用し、絵緯の色も四色と少なめで、むしろ中世の二陪織物に近い感覚がある。

例えば、鶴岡八幡宮の御神宝装束の「白地小葵鳳凰文様二陪織物桂」(唐紙地窠に霰文様二陪織物小桂)や、熊野速玉大社の「萌葱地小葵臥蝶丸文様帔」などに用いられた二陪織物は、紫、白、萌葱、黄、浅葱などを組み合わせた四色程度の絵緯を用いて上文を織り出している。

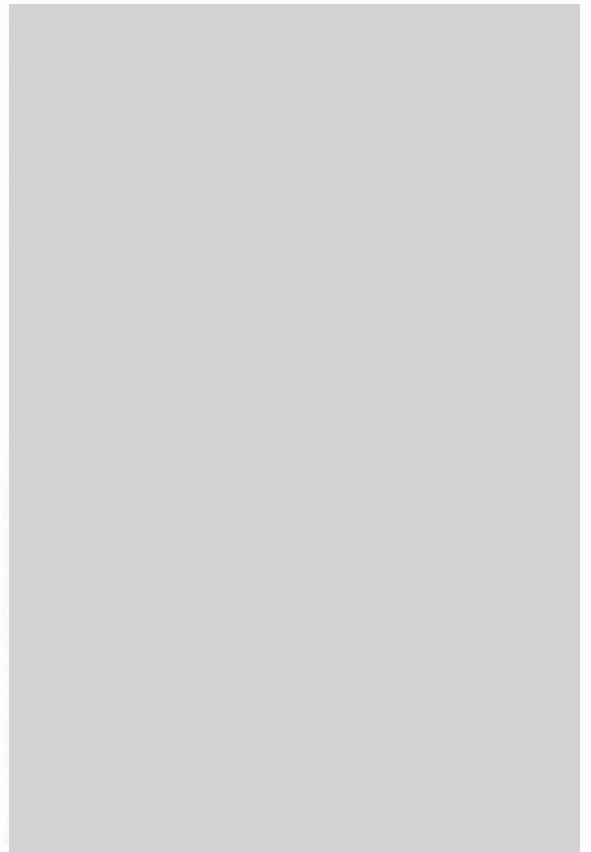
また、長祿二年(一四五八)に足利義政によって奉納されたと伝えられる熱田神宮の古神宝類の「萌葱地小葵桐竹鳳凰文様表着」はやはり二陪織物であるが、小葵文の浮織を地とし、上文に黄色の絵緯



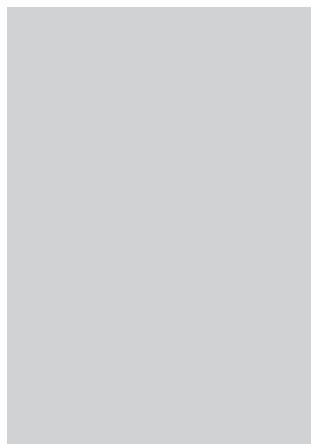
挿図15 流水に岩と竹文様



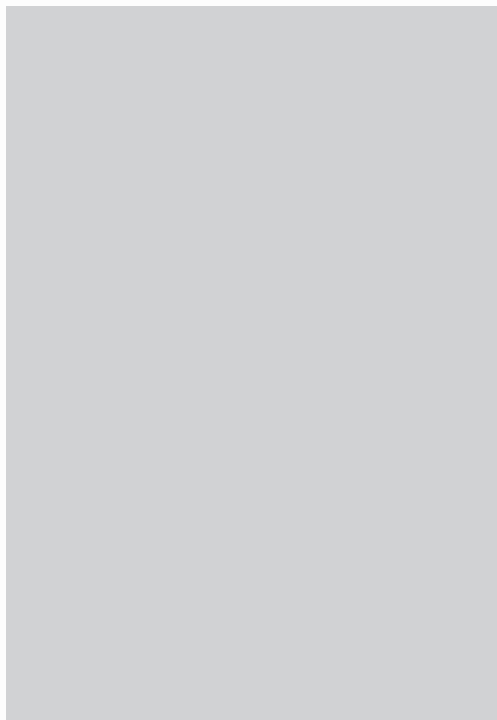
挿図14 椿文様



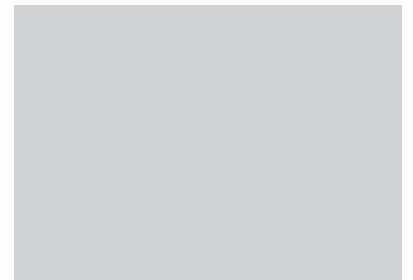
挿図13 九条袷裳 部分



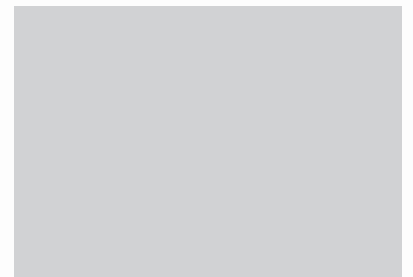
挿図16 柳文様



挿図19 萌葱地小葵桐竹鳳凰文様表着 部分



挿図17 縫取織部分拡大図



挿図18 浮織部分拡大図

で州浜に桐の樹幹と竹を、紫濃淡の絵緯で鳳凰と桐の花葉を縫取織で表わしている〔挿図19〕。ここでは、州浜に桐竹鳳凰文様に黄色と紫濃淡の絵緯を織り入れており、一単位となる上文が複数色の絵緯によって構成されている。

妙光寺の袈裟の唐織の場合も、一単位の文様を四色の絵緯で織り表わすが、絵緯の色は紫、白、萌葱、黄色であり、中世の二陪織物の色彩感覚と共通している。さらに熱田神宮の〈萌葱地小葵桐竹鳳凰文様表着〉にみる竹の葉と、妙光寺唐織の竹の葉の形状〔挿図15〕は類似し、意匠全体をおおう静かな落着いた気分が桃山時代の唐織とは異質の印象を与える。また、妙光寺の唐織の立本文様は、後述するような桃山時代の唐織の樹幹の表現ほど類型化しておらず、古様を示している。

このように見てくると、妙光寺の袈裟の唐織は、室町時代にまで上がるのではないかと考えられる。熱田神宮の〈萌葱地小葵桐竹鳳凰文様表着〉の長祿二年ごろまで遡るかどうかが、確定的なことは言えないが、少なくとも室町時代後半には位置付けられるであろう。

この袈裟には紐の座裏面に「勝目寺／溪雲和尚」の墨書があり、これがこの袈裟の時代を知る鍵となる可能性もあるが、現時点ではこの墨書については詳細がわからない。

ともあれ、妙光寺の袈裟にみる二陪織物に近い中世的な唐織(あるいは唐織物)が室町時代末期から桃山時代になると、より多彩な文様が求められるようになって、いよいよ桃山時代特有の華やかな唐織が生み出されるのである。

## 五、桃山時代の唐織

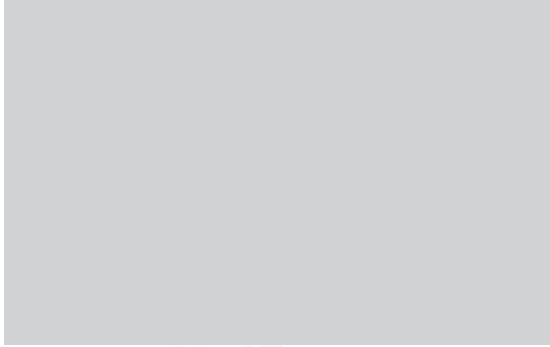
近世初期の唐織については、近年、本能寺に伝来する唐織の袈裟二領が紹介され、その一領が伏見宮日承(天正七年没)所用の〈紫地菊花文様唐織袈裟〉、他の一領が元和八年(一六二二)寄進銘の〈納戸地葵紋亀甲文様唐織袈裟〉で、制作年代の下限を知り得る数少ない近世初期の遺例が示された<sup>⑤</sup>。

高台寺の唐織の打敷は、その一枚に慶長十二年(一六〇七)の銘があるように、本能寺の二領の唐織袈裟の中間に位置する遺例と考えられる。これらの唐織の特色を明らかにするうえで、まずは今まで知られている桃山時代の唐織を概観しておきたい。

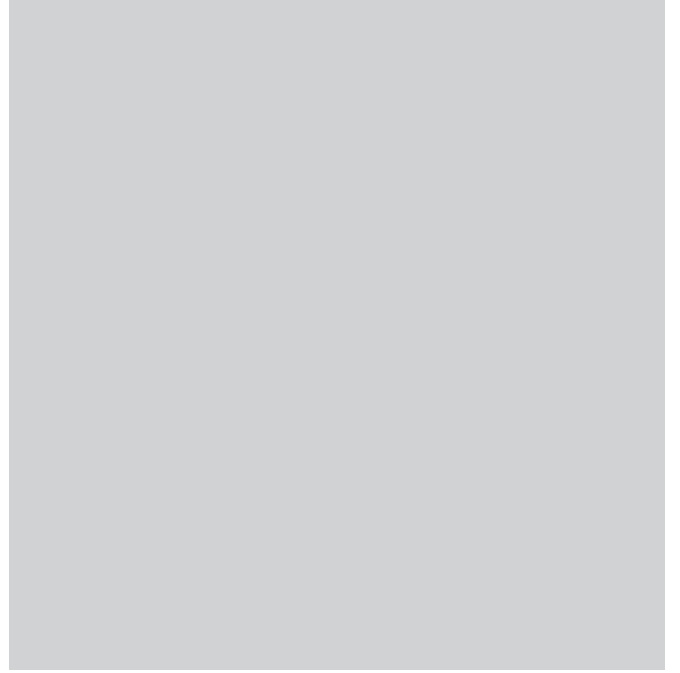
山形県米沢市上杉神社所蔵の上杉謙信所用とされる服飾類のうち、二領の胸服の襟に唐織が用いられている。一領の胸服の襟が萌葱地山道文様唐織〔挿図20〕、もう一領の襟が紅白段替の地に、立涌に桐と沢瀉の文様を織り表わした唐織〔挿図21〕である。

この二領の胸服は、小袖のように衽の付いた古様な形状の胸服であり、伝来通り謙信の遺品と考えて差し支えない。謙信は享祿三年(二五三〇)に生まれ、天正六年(一五七八)に没しているので、これら胸服は室町時代末から桃山時代初頭の制作時期が想定される。二領の襟に用いられた二種の唐織は文様こそ異なるが、ここでは前述の妙光寺の袈裟の唐織とは異なった趣の、紅の濃淡を効果的に用いた華やかな色彩感覚がうかがえる。

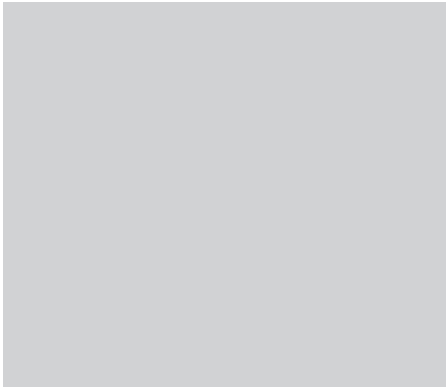
つぎに、防府毛利博物館所蔵の〈山道菊桐文様片身替唐織(能装束)〉



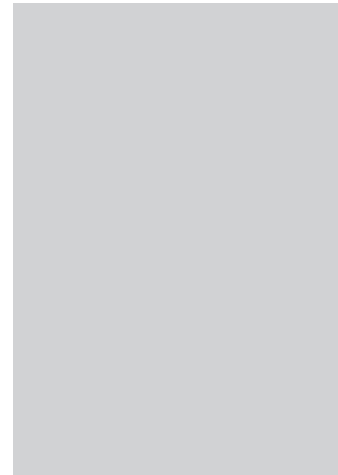
挿図23 猿蒔絵枕 唐織



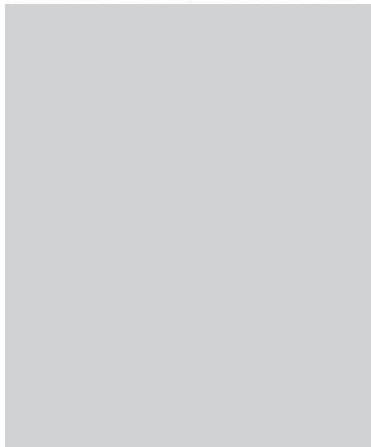
挿図20 上杉謙信所用胴服（襟 山道文様唐織）



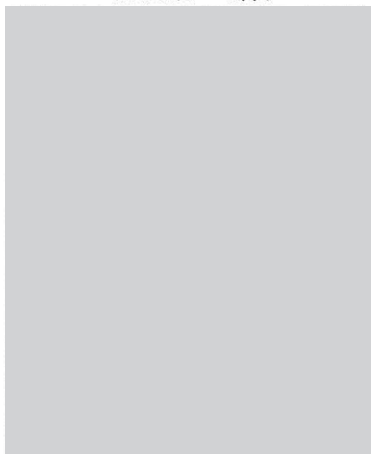
挿図24 紅地枝菊桐亀甲文様唐織小袖部分



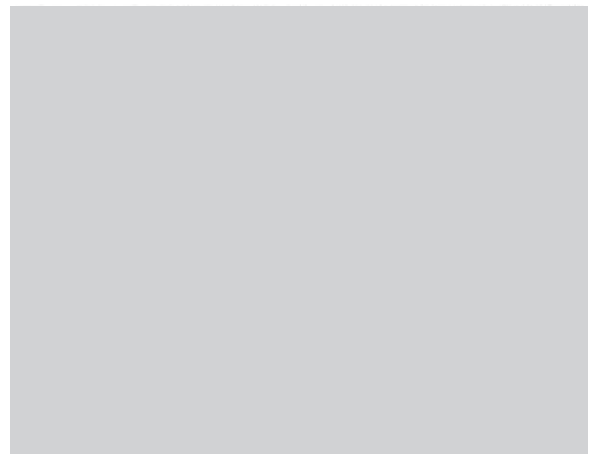
挿図21 立涌桐沢瀉文様唐織（胴服 襟部分）



挿図25 菊桐と格子文様段替唐織（能装束）部分



挿図26 鳳凰桜雪持笹文様唐織（能装束）部分



挿図22 山道菊桐文様片身替唐織（能装束）部分



は、毛利輝元（一五五四―一六二五）が豊臣秀吉（一五三二―一五九八）から拝領したと伝える小袖である。拝領の時期は明確ではないが、左右の身頃の地を、紅と萌葱の色替りの片身替として、山道地に大振りの菊と桐の文様を互の目に配した意匠は力強く、また、柔らかく浮いた絵緯の処理や紅・萌葱を基調にした華やかな配色には桃山時代の唐織の特色がよく示されている〔挿図22〕。

同じく、豊臣秀吉関係では、高台寺所蔵の時絵調度類のなかに、猊時絵の枕があり、この枕に唐織が使われている〔挿図23〕。これらの時絵調度類は秀吉が時絵師幸阿弥家第六代長清（慶長八年没）、あるいはその子第七代長晏（慶長十五年没）に命じて造らせたと思われるもので、猊時絵枕は高台院の所用と伝えられる。ここに用いられた唐織は、紅地に七色の絵緯で藤、菊花、剣花菱、雪輪を表わしている。菊花は表向きの花と、裏向きの花を、部分的に重ね合わせるように表現するが、この方法はしばしば桃山時代の唐織の花文様に見られる特色ある表現である。雪輪文様も桃山唐織に共通した形状を示している。文丈は三五・八センチと大きい、窠間幅は一九・八センチで、織幅に対して二窠間の文様を配す構成も当代の唐織によく見るところである。

林原美術館所蔵の〈紅地枝菊桐亀甲文様唐織小袖〉は、岡山藩主池田輝政の夫人絲子（元和元年没）所用と伝える唐織の小袖である。表地の唐織は、紅地に枝菊、桐、亀甲を一つのブロックとし、これを織幅に二窠間配して、上下には文様の左右が入れ替わったパターンを織り出している〔挿図24〕。この文様構成法は、桃山時代の唐織の特色であり、林原美術館所蔵の〈菊桐と格子文様段替唐織（能装束）〉や厳島神社所蔵の〈鳳凰桜雪持笹文様唐織（能装束）〉など多くの遺例

に見ることができる。前者は、段替のデザインで、いっぽうには浮織で格子に桐と柳唐草文様を織り出し、もう一方には唐織で、白地に菊の折枝と桐文様を織幅に二窠間配して、その上下には文様の左右が入れ替わったパターンを表わしている〔挿図25〕。後者は、紅地に鳳凰と桜、雪持笹を一つのブロックとした同様の文様構成〔挿図26〕である。また、前者の菊、後者の桜の表現は、前述の猊時絵枕に用いられた唐織の菊文様と同様に表裏の花を重ねている。

以上、すでに知られた桃山時代の代表的な遺例を見たが、当代の唐織の特色をより明確に把握するために、次に江戸時代初期の唐織の遺例を検討したい。

## 六、江戸時代初期の唐織

江戸時代初期の唐織の遺例としては、前掲の本能寺所蔵の元和八年銘〈納戸地葵紋亀甲文様唐織袷〉があるが、その後寛永年間にも同様な特色をもった唐織が制作されている。すなわち、元和・寛永期には細かな地文に大振りの上文を配したデザインの唐織が目立つようになるのである。

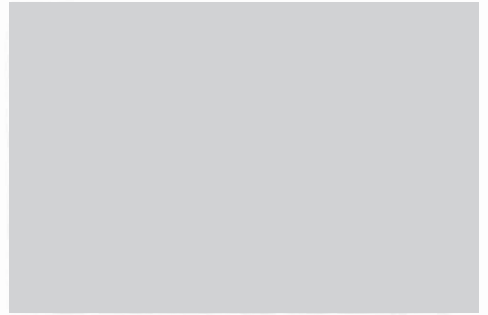
その典型は、徳川美術館所蔵の初音の調度に付属する葵紋亀甲唐織油篋〔挿図27〕である。初音の調度は、徳川家康の長女千代姫が寛永十六年（一六三九）に数え年三歳で、尾張徳川家二代の光友に嫁いだ時の婚礼調度で、油篋も同時期の遺例とされる。その文様は細かい亀甲地に大形の葵紋を織り出したもので、地の赤色も桃山時代の目の醒めるような鮮やかな紅の色調から暗い色調の赤色となり、絵緯も紅色の濃淡ではなく、赤は一色しか用いていない。さらに、文



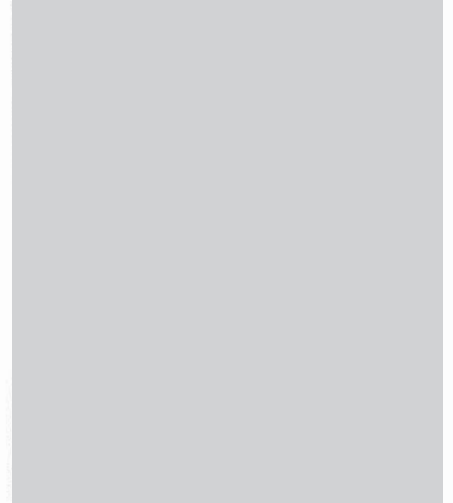
挿図30 葡萄文様唐織文箱袋



挿図29 大繁菱に菊紋唐織文箱袋



挿図27 葵紋亀甲唐織油篋 部分



挿図28 紋綴じ 葵紋部分

様の絵緯が長く渡る面には山道形の綴じ搦みが施されている〔挿図28〕。

西陣では、この綴じ搦みのことを「紋綴じ」と呼び、江戸時代以降、唐織に紋綴じを入れることが常套的に行なわれているが、桃山時代の唐織では紋綴じを施した遺例は少ない。紋綴じは浮織特有の技法で、渡りの長い大きな文様を織り出そうとする時、絵緯が浮くのを押さえるために施すが、桃山の唐織は文様の面に全く無関係で不自然な紋綴じを施すことを好まず、絵緯のほどよく浮いた柔らかな風合を好んだのである。

さて、千代姫所用の唐織は、他に文箱の袋がある<sup>9)</sup>。文箱袋の唐織は、幸菱に葵紋・大繁菱に菊紋・葡萄文様・井桁菱に菊花文様・井桁菱に輪宝文様の五種類があり、制作年代も若干幅をもたせて考える必要があるが、そのなかで大繁菱に菊紋唐織〔挿図29〕は、細かな入子菱の地文に上文として菊花を配した文様で、地文と上文を明確に分化しようとするデザイン感覚は油篋のそれと共通している。地文に上文を配する文様は、公家の二階織物に通例の文様構成である。元和、寛永期の唐織に亀甲、入子菱、幸菱などのモチーフを地文とし、これに上文を置く有職風の意匠が多く見られることについては、元和六年（一六二〇）六月に行なわれた東福門院入内の盛儀を契機に、伝統的な有職織物が復興したためと指摘されている<sup>10)</sup>。地文と上文から構成される意匠は桃山時代の唐織にも見られる。しかし、桃山時代の唐織では、地文と上文が等質的な関係にあり、地文と上文を明確に分化しようとするデザイン感覚は見られないのである。

同じく、文箱袋に用いられた葡萄文様唐織〔挿図30〕は、文丈が三

六・六センチ、窠間幅が一九・八センチで、織幅に二窠間の文様を配する方法は、桃山時代のそれを踏襲しているが、上下に繰り返される文様は左右が入れ替わらず、また三六・六センチの長めの文丈にもかかわらず、個々の文様は細かくなっている。

さらに、この唐織で注目されるのは、葡萄の葉の一部に金糸が織り込まれていることである。江戸時代の能装束の唐織には、文様部分ばかりでなく、金地金欄のように地にも金糸を織り込んだ絢爛たるものが織り出されている。しかし、桃山時代の刺繍に金糸が用いられなかったように、桃山の唐織に金糸を織り込んだ例は現在のところ確認されていない。

## 七、高台寺の唐織の特色

江戸時代初期の唐織と桃山時代の唐織とを比較することで、桃山唐織の特色が明瞭になった。桃山唐織の特色については、すでに指摘される<sup>②</sup>ところであるが、今まで見てきた例を含めて、それらをまとめると以下のようなだろう。

① 通し文様のほか、片身替、段替など中世以来の意匠構成を受け継ぐ。

② 文様の構成は、一ブロックとなった単位文様の繰り返しで、織幅に二窠間配し、その上下には単位文様の左右を入れ替えたりパターンを置いた構成が少なくない。

③ 文様は、モチーフを平面的・並列的に配置する傾向にある。地文に上文を配する構成の場合は、地文と上文の間に主従がなく、それぞれが等質的に扱われる。

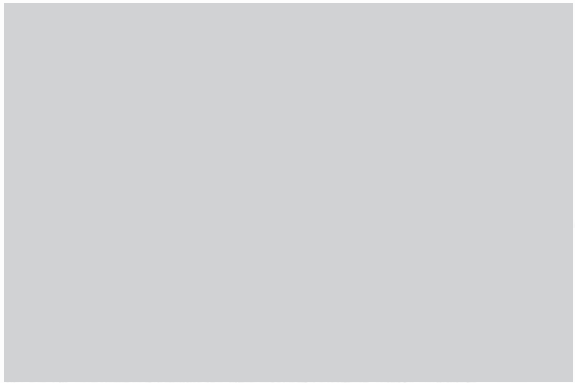
④ 絵緯は渡りが長く、紋綴じをほとんど施さないため、柔らかく浮き、文様に量感がある。

⑤ 地色は、紅・萌葱・白が好まれ、絵緯には紅濃淡、萌葱、浅葱、縹、紫、白など七〜九色ほどの色糸を用いることが多く、なかでも紅の濃淡を効果的に用いるが、金糸は使用されていない。

ここで、改めて高台寺の唐織をみると、いずれもが桃山唐織の特色を有していることがわかる。

1番の萌葱地立涌桐文様唐織〔挿図1〕では、地文の立涌に上文の桐が配されているが、江戸時代初期の唐織ほど地文と上文が明確に分化されていない。文様は立涌が連続した通し文様であるが、単位文様を織幅に二窠間配して、上下には文様の天地左右が入れ替わったパターンを連続させている。また、紅は濃淡が使い分けられ、さらに、白の絵緯を主とする立涌の一部に紅の絵緯を配して色分けがなされている。こうした色替りのデザインは当代の刺繍にもよく見かける特色である。

この唐織は裏面の銘に、高台院が慶長十二年（一六〇七）七月に寄付したと記されている。高台院は寛永元年（一六二四）に七十七歳で没している<sup>④</sup>ので、生前六十歳の時の寄付ということになる。この年、慶長十二年八月は秀吉が没して十年目にあたるが、年忌法要の年ではなく、他に何らかの理由でこの打敷を奉納したのであるが、そのことは明らかでない。ともあれ、この打敷は鏡仕立ての仕様から見て、小袖や打掛のような衣服を打敷に仕立て直したものであり、もとは高台院の着衣であったと考えるとよいであろう。



挿図31 萌葱地立涌菊文様唐織打敷 部分

この唐織の制作年代は、当然慶長十二年以前になるが、これに類似した文様の唐織が京都妙心寺の塔頭長慶院に伝来している。それはやはり打敷で、高台院の姉にあたる長慶院（三折全友夫人 寛永二年没）愛用の衣裳と伝えられる。文様は萌葱地に白の絵緯で立涌を表わし、上文に菊文様を織り出している（挿図31）。立涌が連続した通し文様で、菊の単位文様を織幅に二窠間配して、上下には文様の天地左右が入れ替わったパターンである。この菊文様を桐文様に置き換えれば、まさに高台寺打敷の萌葱地立涌桐文様唐織となり、高台院、長慶院とほぼ同世代の女性の衣服に用いられ、制作年代も近い唐織と考えられる。

2番（挿図2-1a・b）は、経糸の締切りで、紅・白の段を表わし、紅段には山道に菊桐文様、白段には枝垂れ桜文様を織り出した段替の唐織である。これと全く同一の唐織が東京国立博物館の能装束（挿図32）に見られる。

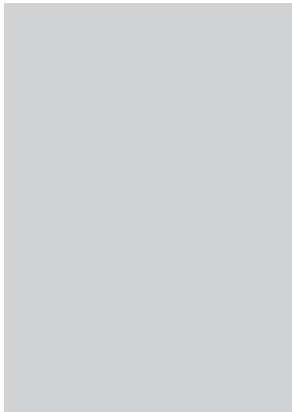
紅段の山道と菊桐紋とは、地文と上文の構成になっているが、そのバランスは等質的で、さほど地文と上文とが分化していない。また、山道の文様は部分的に絵緯の色を変える色替りの手法が顕著である。

白段の桜樹の樹幹は類型化した表現（挿図33）で、類似の文様は高台寺打敷の7番③の（紅地薔薇と雪持柳文様段替唐織）の雪持柳文様（挿図34）や東京国立博物館の（緑地雪持柳桐菊梅文様片身替厚板（能装束）の雪持柳文様などにも認められる）。この種の樹幹は、柳であれ、桜であれ、ほとんど変りない類型化した表現であり、樹幹の中に表わされた花文様（本来妙光寺の唐織の立木文様に見るような樹幹に付着した苔の表現が装飾的な花文様へと変化したものと考えられる）を見ると、デザイン面でモティーフのパターン化が進んでいることに気付く。ここでも桜花の文様は表裏二つの組み合わせで表現されている。

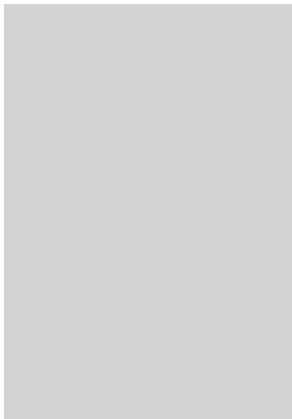
3番（挿図3）は、萌葱地に鶴・亀甲・菊花・桐・竹・松という吉祥文様が織り出された唐織である。文様の組み合わせは一見複雑な印象を与えるが、個々のモティーフは重なり合うこともなく、平面的に配置され、ほぼ正方形の一ブロックとなつて、織幅に二窠間、上下は左右が入れ替わった桃山唐織のパターンで織り出されている。

4番（挿図4-1a・b）は、襷に桐雪持柳文様と楓筏文様を段替に表わした唐織で、常盤の文様である桐と、秋の楓、冬の雪持柳のモティーフを組み合わせたデザインである。紅地に黄色の絵緯で二重襷を織り出して、上文に桐と雪持の柳葉を表わし、二重襷の間の地に柳葉からこぼれ落ちた雪を大小の雪輪として配している。雪輪は高台寺の獲時絵枕の唐織にみる雪輪と類似した形状を示している。

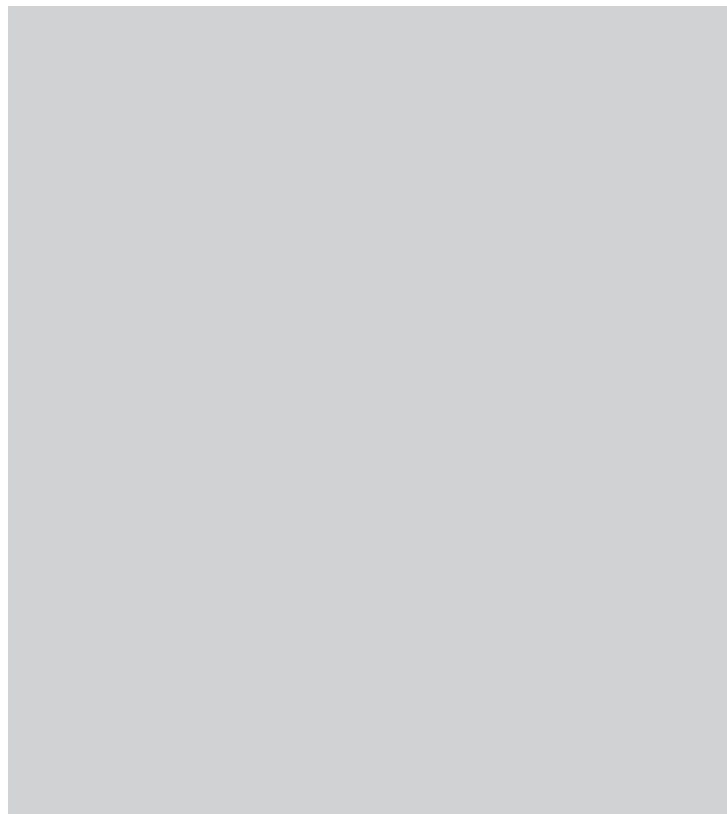
もう一方の段は、高台寺御霊屋須弥壇の階段に施された蒔絵に見られるような花筏文様のバリエーションで、桜に代えて楓を散らす。



挿図33 桜樹文様



挿図34 雪持柳文様



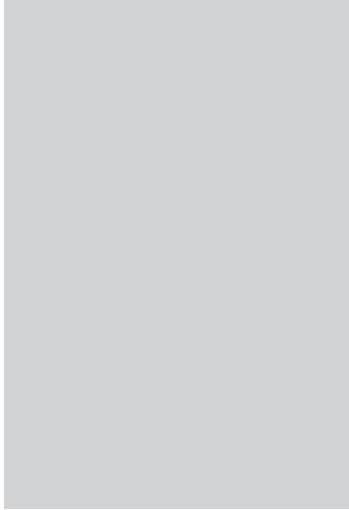
挿図32 紅白段替山道に菊桐紋と枝垂桜文様唐織（能装束）

文様の構成は、流水に筏と楓が一ブロックとなり、やはり織幅に二窠間、上下で文様の向きが変わるパターンである。

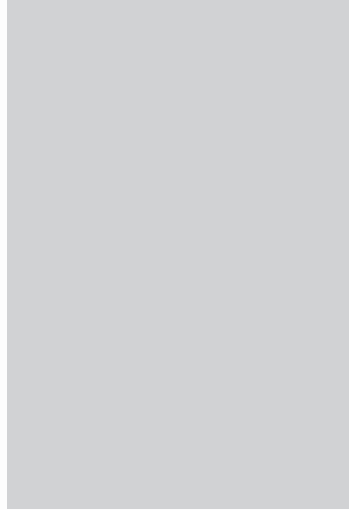
5番〔挿図5〕は、萌葱地に三ツ盛菊と桐の文様を交互に配した唐織である。三ツ盛菊や桐の文様は、後世のような家紋としての意識ではなく、一つのデザイン・モチーフとして並列的に配置されている。文様は大振りで、三ツ盛菊と桐のモチーフを交互に配するだけの単純な文様構成であるが、紅濃淡・白・青緑・縹・紺・萌葱・鶯・薄茶の九色の絵緯を駆使した多彩な色彩の組み合わせで三ツ盛菊と桐を織り出し、モチーフの単純さを色彩面から補っている。とりわけ、濃淡二色の紅が華やかな印象を与える。

6番〔挿図6〕には二種の唐織が縫い合わされている。一種は白地に縄目襷を地文とし、上文に大振りの枝垂れ桜の文様を配した唐織〔挿図35〕。縄目の襷文様は珍しいが、正面から据えた大振りで平板な感じの桜花文様は、8番の慶長七年銘の刺繍の桜花〔挿図36〕と類似している。

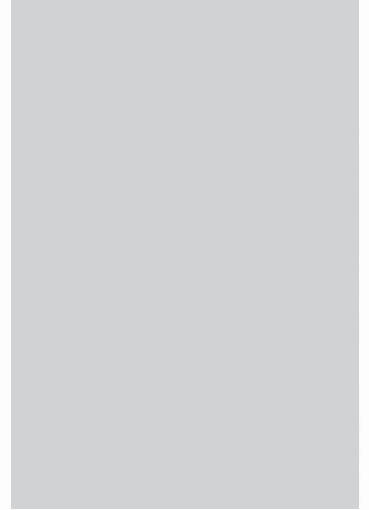
もう一種の唐織は、紅と萌葱の締切段替地に、紅段には地文に白の絵緯で松皮菱を織り出し、上文に枝垂れ桜を表わす〔挿図37〕。いっぽう萌葱段には桐と菊（表菊と裏菊の二種）の文様〔挿図38〕を交互に配している。紅と萌葱を段替にした地色や多彩な絵緯の色使い、あるいは紅段の枝垂れ桜文様にみる表裏二種の花を重ねる表現は桃山時代の唐織を示しているが、全体に文様が小柄になり、織幅に三窠間の単位文様の構成は、江戸時代初期の唐織への移行を示す過渡的な様相と見るべきであろうか。



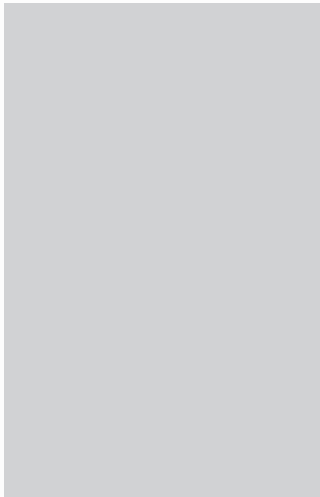
挿図37 松皮菱に枝垂桜文様



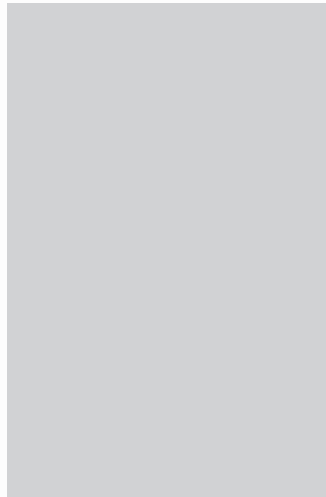
挿図36 紅白浅葱段替桜樹文様  
刺繡打敷 桜文様部分



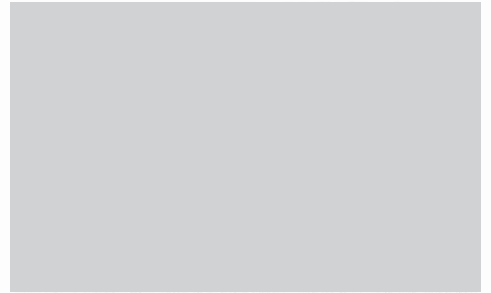
挿図35 白地縄目襷に桜文様  
唐織



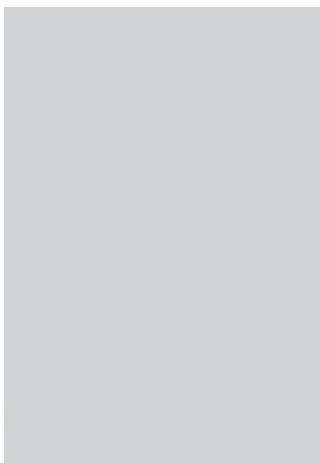
挿図40 紅地薔薇と雪持柳  
文様段替唐織 部分



挿図39 紅地枝菊楓文様  
唐織 部分



挿図38 菊桐文様



挿図43 萌葱地桐雪輪文様  
唐織 部分



挿図42 紋綴じ 薔薇の葉部分



挿図41 薔薇文様

7番〔挿図7〕は、六種類の唐織が縫い合わされているが、このなかで主として用いられるのは①紅地枝菊楓文様唐織、②萌葱地桐雪輪文様唐織、③紅地蕃薇と雪持柳文様段替唐織である。

なかでも典型的な桃山時代の唐織の特色を示すのは①で、菊花は表裏二種を重ねた桃山唐織特有の表現〔挿図39〕がなされている。

③は、段替に蕃薇と雪持柳の文様〔挿図40〕を構成しており、雪持柳の樹幹や雪輪は桃山唐織にしばしば見出すモチーフであり、蕃薇の花もやはり表裏二花を重ねている〔挿図41〕。ここで注意されるのは、蕃薇の葉の一部にわずかながら山道形の紋綴じ〔挿図42〕が施されていることで、桃山唐織に施された紋綴じの原初的な姿が見とれる。

②の唐織においては、より明確な山道形の紋綴じが葉に積もった雪や雪輪の部分に施されている〔挿図43〕。この唐織は、絵緯の色使い、桐や雪輪の形状などに桃山時代の特色を示し、窠間幅が一九・五センチと桃山唐織の通例であるが、文丈は四五センチに及び、絵緯の浮きも最大箇所四・一センチもあり、桐や雪輪など個々のモチーフも大振なことから、紋綴じを施さざるを得なかったのであろう。現存遺品からすれば、例外的な存在といえる。

④紅地花菱と菊花文様唐織、⑤萌葱地藤菊に桐丸文様唐織は断片的にしか使用されておらず、文丈・窠間幅も不明であるが、やはり桃山時代の唐織と思われる。⑥白地縄目襷に桜文様唐織は6番―①と同種である。

以上、高台寺の打敷に用いられた唐織は、いずれも桃山時代の唐織の特色を有するものと指摘できる。これらの打敷が一括し

て奉納されたという確証はなく、すべてが高台院の寄付にかかる遺品とも言えない。七枚十二種の唐織の制作年代の編年は、いまの段階では難しいが、このうちの一枚に慶長十二年の銘があり、高台寺の前身である康徳寺時代を含めても、高台寺にこれら唐織が打敷として奉納された時期は、天正末期より上がることはない。それを勘案して、これら唐織の制作時期は概ね天正から慶長期と考えるとよいと思われる。一枚一枚、文様が異なり、その文様のなかには今までに見られないデザインも含まれている。このように高台寺の唐織打敷は、新たに桃山時代の染織資料となるものといえよう。

### おわりに

桃山時代は唐織が能装束ばかりでなく、小袖にも好んで用いられた時代である。かつて、室町時代に貴人の料とされた唐織物も次第に華麗さを増した唐織へと変容し、桃山時代には、より多くの人びとの着るところとなった。『慶長見聞集』（一六一四年）は「御代ゆたかにして貴賤男女共にむかし見も聞もせぬ結構成唐織を着給ふ」と、その状況を語っている。しかし、その後江戸時代には「重厚な唐織が人びとの美意識に適わず、一般の小袖には好まれなくなり、唐織はひたすら能の装束として豪華さを求めていった。唐織が衣生活のなかで、モードとして成立するのは室町から桃山時代にかけてであり、その最盛期が桃山時代にあったことは高台寺に伝えられた唐織からもうかがうことができよう。

### 〈注〉

1 康徳寺の創建は明確でないが、天正末年から慶長三、四年頃に高台院

- が生母のために建立した曹洞宗の寺院といわれる。はじめは現在の上京区寺町通御霊馬場の高徳寺町に所在したが、慶長十年（一六〇五）に東山の現高台寺の地へ移転した。同年九月には、徳川家康から旧康徳寺以来の寺領百石を高台寺の寺領として認める安堵状（高台寺所蔵）が発給されている。康徳寺の移転とともに堂宇の建設がなされ、翌十一年に高台寺の建物が竣工した。（「高台寺誌稿」『当代記』）
- 2 切畑健「元和・寛永銘小袖裂打敷（真珠庵蔵）について―江戸時代前期の染織資料―」（『MUSEUM』第三七六号 一九八二）
- 3 このことについては、すでに拙稿「滋賀県政所八幡神社の能装束」（『MUSEUM』第四一〇号 一九八五）、「能の伝書に見る装束」（東京国立博物館特別展観目録『能・狂言装束』所収 一九八七）等で述べた。本章の引用文献はそれらと重複する箇所があるが、本論を展開するうえで必要と思われるので再度採り上げた。
- 4 表章、伊藤正義校注『金春古傳書集成』解説（わんや書店 一九六九）による。
- 5 小笠原小枝氏は『染織（中世編）』（『日本の美術』第二六四号 一九八八 至文堂）において、縫取織系の織物を唐織物と呼んだことについて、「縫取の織物をなぜ唐織物と呼んだのか、また平安時代の物語のなかで唐織物と呼ばれたものが、実際にこうした縫取の織物をさしたものがどうかとも判然としないが、中国においても唐代の緯錦に対し、部分的に絵緯を織り入れる縫取技法が用いられるようになったのは宋代の頃からと考えられている。従って明・清になって「宋式錦」と呼ばれる錦は、通しの絵緯のほかに縫取の絵緯を加えた錦をさしている。宋から渡ってきた縫取織の唐織が「唐織物」として珍重され、それが和様にいかされたのであろうか。いずれにせよこうした「唐織物」「二陪織物」にみられる縫取の技法は、近世の華麗な能装束の「唐織」につながるものとして興味深い。」（一八〇―一九頁）と指摘されている。また、西村兵部氏は『毛利家伝来衣裳』（講談社 一九六九）のなかで唐織について、「唐織は「雍州府志」に倭屋なるものが慶長年中、蜀江錦に模して五彩の糸にて花鳥、花卉等の文様を織ったところから名がでたとするが、唐代以来紋織物としてつかわれていた高機（花機ともいう）が明代江南の地において改良され、その改良機にヒントを

得た織機によったところから唐織との名がつけられたのであろう。しかしつくり出される紋織は三枚綾の地にふんわりとした感触のある浮織であり、なよなよした優雅さをもつ二重織物の系統に属するものであって、平安時代以来もちつづけられた日本人の肌にあつた織物である。」（本文六頁）と述べられている。

- 6 佐藤理恵「初期唐織の変遷と現存作例の制作年代について―本能寺唐織袈裟を手掛かりに―」（『MUSEUM』第四四四号 一九八八）
- 7 吉村元雄「高台寺時絵概説」（京都国立博物館『高台寺時絵』一九七一―）
- 8 佐藤理恵「過渡期の唐織―初音の調度に含まれる染織品から―」（『金鯨叢書』第一七輯 一九九〇）
- 9 前掲注8佐藤論文
- 10 北村哲郎「紋織の系譜」（日本染織芸術叢書『紋織III』所収 一九七三）
- 11 慶長末年から元和期にかけては、慶長小袖に代表されるように繡箔の文様などもやはり小がらのものを好む傾向があつた。拙稿「慶長小袖の系譜―その成立と展開―」（『MUSEUM』第三八三号 一九八三）
- 12 前掲注10北村論文。
- 切畑健「織・繡・染」（京都国立博物館『日本の染織―技と美―』一九八七）
- 〔付記〕本稿は、平成三年十一月三十日の美術史学会西支部例会（於関西学院大学）における口頭発表「桃山時代の唐織について―高台寺の唐織打敷を中心に―」に加筆訂正したものである。